

水稻長稈品種チネリア－ママの乾物生産に関する研究

－庄内地域と村山地域の差に着目して－

島本 聡^{1*}・角田憲一¹・佐々木由佳¹・菅原政志²・安藤 豊¹

(¹山形大学農学部・²村山農業高校)

Studies on Dry Matter of Long-Stem Rice Cultivar Chineria-Mama

-Difference between Shonai and Murayama Regions -

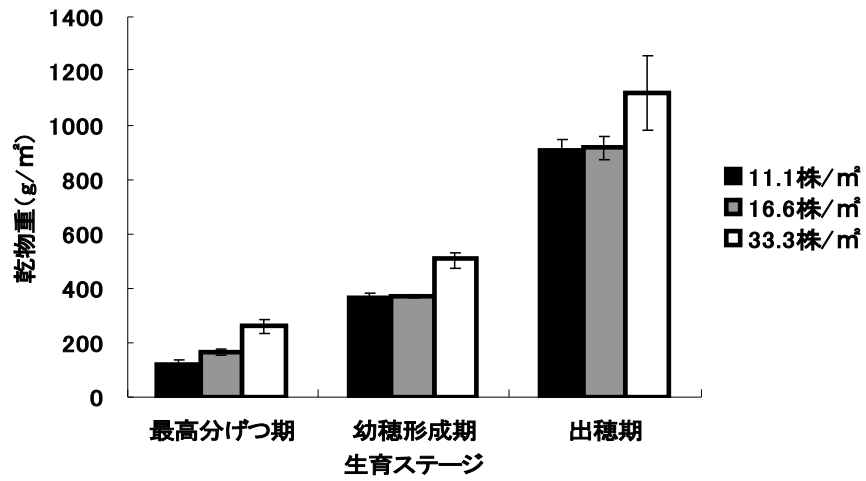
Satoshi Shimamoto^{1*}, Kenichi Kakuda, Yuka Sasaki, Masashi Sugawara² and Hou Ando¹

(¹Faculty of Agriculture, Yamagata University, ²Murayama Agricultural High School)

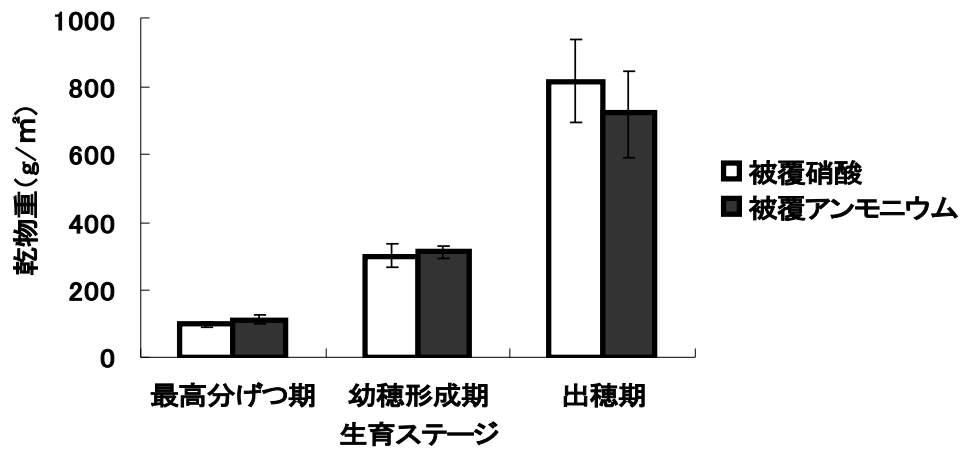
近年山形県で育成された長稈型水稻品種チネリア－ママは、乾物生産性・耐倒伏性に優れた地上部収量が高い品種であるとされている。しかし2005年に庄内地域で本品種の栽培試験を行なったところ、その地上部乾物収量は短稈のはえぬきと同等であった。一方、村山地域で栽培されたチネリア－ママを調査したところ、幼穂形成期～出穂期のCGRが高く地上部乾物収量が庄内地域のものよりも高くなっていたことが明らかとなった。両地域の栽培環境を比較すると、村山地域では庄内地域よりも栽植密度が疎であったことと、灌漑水中の硝酸態窒素濃度が高いことが認められた。そこでこの両地域の幼穂形成期～出穂期の地上部乾物収量の差について栽植密度および無機態窒素のソースの点から検討した。

＜試験方法＞**試験地**：山形大学農学部附属農場内水田。**供試品種**：チネリア－ママ。**処理区**：栽植密度：①11.1株/m²、②16.6株/m²、③33.3株/m²、各処理区には硫安を6g-N/m²(基肥)、2g-N/m²を2回(-26、-12、追肥)施用した。肥料形態：④被覆硝酸肥料区＝被覆硝酸肥料を基肥施用時に9.5g-N/m²施用、⑤被覆アンモニウム区＝被覆アンモニウム肥料を基肥施用時に5.5g-N/m²施用。各肥料形態区④、⑤区の栽植密度は16.6株/m²とした。

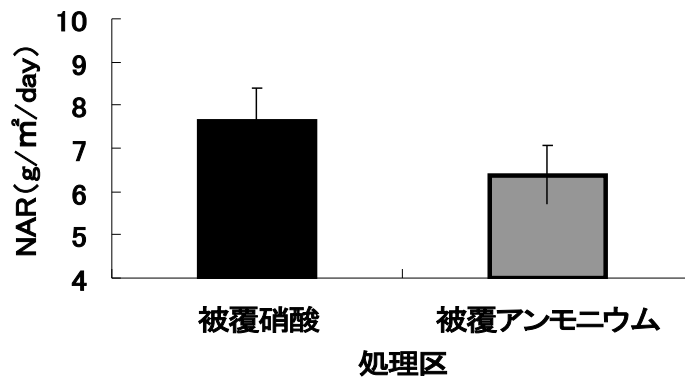
＜結果＞①チネリア・ママの地上部乾物重は栽植密度が疎よりも密で高く推移した(第1図)。②被覆硝酸肥料区の幼穂形成期から出穂期の乾物増加量は被覆アンモニウム区よりも高い傾向にあった(第2図)。③被覆硝酸肥料区の幼穂形成期～出穂期のNARは被覆アンモニウム区よりも高い傾向にあった(第3図)。



第1図: 栽植密度が乾物重に及ぼす影響



第2図: N源が乾物重に及ぼす影響



第3図: 幼穂形成期～出穂期のNARとN源の関係